令和７年度幼児教育研究協議会　概要

記録者　認定こども園新庄幼稚園　　細川　紫
富山短期大学付属みどり野幼稚園　梶　義典

１　講演について

演題

「幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について－幼児教育と小学校教育がつながる工夫－」

講師　文部科学省　初等中等教育局　視学官　横山　真貴子　氏

(1)　幼児教育の基本的な考え方の共有

幼児期の遊びを通した学びについて、保護者や地域の人たちに、保育者が自身の言葉で伝え、共有する。

(2)　幼児教育の基本

環境を通した教育が実践できているのかを見直す。

(3)　幼児教育に関わる最近の動向

①　学習指導要領改訂に向けた議論

改訂があっても、幼児教育における大切なことは変わらない。

②　課題と方向性

幼児の発達に必要となる、様々な人やものと関わる体験の十分な確保が困難になっている。そのため、意図的に関わる体験を一層充実させる。

(4)　幼児教育と小学校教育との円滑な接続の推進について

①　幼保小の架け橋プログラムで目指すこと

全ての子供に学びや生活の基盤を育む。

②　架け橋プログラムの成果

ア　幼児教育施設における保育の変化

・体験や経験を重視した保育

イ　小学校における指導方法の変化

・体験的要素を取り入れた導入活動

・小学校はゼロから指導するのではないという意識

・子供に聞いて考えを引き出すなどの、考える力を伸ばすための指導の意識

③　進めていくための留意事項

ア　自分たちはどのフェーズにあるのか、現状を把握する。

イ　期待する子供像（育む資質・能力の方向性）を共有する。

ウ　遊びや学びのプロセスを共有する。

④　協議の視点

ア　幼児教育施設間、幼児教育施設と小学校間における相互理解の促進

イ　架け橋期のカリキュラムの開発

(5)　最後に

①　現状把握から、自分たちの強みを知る。

②　うまくいきそうなところから始める。

③　地道にコツコツと、段階的に進める。

④　地域、県、養成校教員等と連携し、ネットワークを広げる。

２　研究発表について

発表者　高岡第一学園認定こども園第二幼稚園　谷川　淳郎
記録者　高岡第一学園附属第一幼稚園　平谷かおり

(1)　協議主題

幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について

(2)　研究の視点

①　小学校区内の幼保小との連携を密にし、学習参観、保育参観、交流活動等を通して互いの教育への理解を深めながら、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手がかりに語り合い、具体的な子供の姿を接続カリキュラムに反映させる。

②　小学校教育を見据え、資質・能力をバランスよく育むための指導計画を立て、実践し、評価、改善を図る。

(3)　実践より明らかになったこと

①　幼小の教師が交流のねらいを共有し、事前と事後に協議したことで、子供の姿を具体的に捉えることができ、活発な意見交換につながった。また、交流活動の中で子供同士の自発的な関わりが生まれ、主体的に取り組む姿が見られた。園で目指す子供の姿や保育者の援助の様子を小学校の教師に参観してもらったことは、「小学校はゼロからのスタートではない」ことの理解につながった。このように、学びのつながりを意識した交流活動を、幼小の教師が協働で計画・実施し、振り返ることで相互理解を深めることができる。

②　小学校だけでなく、校区内保育園の保育者を招いて公開保育を実施したことは、幼保小が顔を合わせて話し合い、それぞれの活動内容や子供の育ちに違いがあることを知るよい機会となった。また、その際に「保育参観シート」を用いたことで参観の視点が明確になり、保育者も幼小の教師も共通の視点で話し合うことができた。このようなつながりを今後も継続し、気軽に話し合える関係づくりを構築していくことが、協働で接続カリキュラムを作成していく上で有効である。

(4)　指導助言事項　西部教育事務所　水口　恭子　指導主事

①　【取組１】について

幼稚園と小学校のそれぞれのねらいを共有し、実施前の計画から実施後の意見交換までを一連の流れとして計画的に取り組むことは、互いに意義のある交流活動とするために有効である。年長児が小学校１年生を招待する形での交流活動では、双方の教師が、事前に支援や配慮すること等について共通理解を図ったことが、交流会当日の子供たちの主体的な関わりにつながった。事後に、学びの連続性について子供の姿を通して意見交換をしたことは、子供の状況を把握しながら互いの保育や教育についての理解を深めることに有効であった。また、取組の成果や反省点を次年度に生かすことにもつながり、幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進に効果的である。

②　【取組２】について

幼児教育と小学校教育の円滑な接続のためには、まずは気軽に会って話せる関係づくりが大切である。合同研修会で校区の幼稚園、保育園と連携を図ったことで、幼児教育施設間の横のつながりを深めることができた。また、参観の際に「保育参観シート」を活用したことは、幼保小の参加者が同じ視点で参観し、協議する上で効果的であり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基に、注目した遊びの場面や子供の様子、環境構成の工夫や保育者の援助等、具体的な話合いをすることにつながった。幼児教育と小学校教育で育成したい子供の姿や、そのための保育者や教師の効果的な関わり方等を互いに理解することが、子供が安心して学び続けることのできる環境づくりにつながっていくと考える。今後も幼保小の連携をより一層強化し、子供の育ちや学びを共有しながら相互理解を深めていくことが大切である。